霜月に岩作三ケ峯の音（ね）に入る
フィールドレコーディング・ワークショップ

各グループそれぞれが録音場所を決め、18 時 58 分から録音を開始する。19 時 00 分に時報となるような音を鳴らす。19 時 01 分に録音を終了する。ここに流れている音は、各グループが録音した、愛知県立芸術大学構内の 2022 年 11 月 16 日 18 時 58 分～ 19 時 01 分の 3 分間の音です。この展示では、各グループの音声をランダムに再生します。複数の音声や全部の音声を同時に再生することもあります。個の聴点と多聴点からなる、霜月の岩作三ケ峯の音に入ってみてください。

担当：学務課メディア映像スタジオ職員 上山朋子、芸術学専攻准教授 金子智太郎

※学年は昨年度のもの

1 金高恵呼（陶磁 2年生）＋ 渡邊奈波（作曲 3年生）

食堂近くの池の水を木の枝でパシャパシャしている様子。１人が主に音を出し、もう１人は録音をしながら、節があるやや太めの草で水面を掻き回している。小石やどんぐりなども池に投げ入れて音にバリエーションを出したが、最後の方で上着の裾を擦って音を出し静かな時間が続き過ぎないようにした。

2 古木彩音（作曲 院2年生）＋ 永安大喜（作曲 3年生）

講義棟西側の芝生の広場にて録音。切り株の上にレコーダーを置き、１人がヘッドホンをつけてモニタリング、もう１人が音を発生させた。前半は自ら音を発することなく、自然の静かな音のみを録音。後半は、切り株を石で擦ったり、木の枝で芝生を撫でたりして音を発生させ録音。

3 三林沙貴人（陶磁 3年生）＋村瀬有咲（作曲 4年生）

金属ゴミ置き場にて、鍋やフライパンなどに小さいネジや釘などを入れ、マイクの前で擦りながら移動した。金属同士の擦れる音やコンクリートの音が痛々しくておもしろく感じたのでこの場所を選んだ。音が右から左、左から右へと移動するのがわかりやすいように長い距離を移動した。

4 金慧仁（陶磁 研修生）＋ 内垣亜優（作曲 3年生）

夜に録音するからこそ聴こえる音を録りたかったため、虫の鳴き声やキャンパスから寮へ帰る学生の喋り声、高校生の部活動中の声がよく聴こえそうな場所を選んだ。想定通りとはいかなかったが、偶然近くで録音していたグループの立てた音が入り込んだので、これはこれでいいものが録れたと思う。

5 永井友雪（陶磁 3年生）＋溝上空弥（作曲 3年生）

池に落ちる石の音は静と動を二極化したような世界に対して、遠くにトランペットの無関係な音が流れているという、日常音を思い起こさせる録音。

6 中島優（陶磁 2年生）＋ 上野菜々（作曲 4年生）

音楽棟 3 階から、1 階ロビーで声楽の学生がオペラの練習をしている風景を録音。マイクを手で覆い、私たち録音者が介在する事で、かえって音が聴こえにくくなる、という表現を試みたが、19 時になると練習が終わってしまい、演奏者が帰っていった。

7 石川菜々子（デザイン 院1年生）＋ 大石愛莉（作曲 3年生）

デザイン棟の下にあった台車にタオルでくるんだレコーダーを乗せ、「デザイン棟２階から１階へ降り、寮へ帰る学生」の視点で録音した。台車と地面の響きから、その場その場の空間をグラデーションのように感じていたんだと気づいた。19 時にお別れの言葉を言うことで、そこにいた証拠を残した。

8 浅野詩織（陶磁 院1年生）＋ 寺島青空（作曲 4年生）

旧芸術学棟前、愛知県芸に来たら誰もが必ず通る場所。美術学部と音楽学部の分かれ道ともいえるかもしれません。県芸の自然豊かな環境から生まれる虫や草の音と、足早に帰る人々からなる人工の音の境目として、この場所を選んだ。

9 石黒美咲（陶磁 2年生）＋ 佐光涼夏（作曲 3年生）

夜にしかない音を録音したいと思った。人が帰宅する音を録ろうと考えていた。大学の名前が書かれているあの場所では、歩いて帰る人、自転車、車の音が聞こえた。また、高校生が部活をしている音も聞こえた。

10 野口陽平（陶磁 3年生）＋ 川村瑳歩（作曲 3年生）

生協前の枯葉に覆われた場所で録音。枯れ葉を山積みにし、ペットボトルの水を流して音を作った。雨が本格的に降り始める前、枯れ葉に雨粒があたりパタパタという音がとても綺麗で演出できないかと思い、実験的に録音。

愛知県立芸術大学キャンパス内録音場所

愛知県立芸術大学

陶磁専攻芸術表現コース × 作曲専攻作曲コース
合同課題発表展

resonancia
二

演奏会を
室内学ホールにて
4月18日に
開催予定
詳細は
大学 Web ページに
掲載

2023.4.18（Tue.)～4.20(Thu.)
10：30~16:30

＠ 愛知県立芸術大学芸術資料館

※新型コロナウイルス感染症の状況により、予定を変更する場合がございます。最新情報は大学ウェブサイトでご確認ください。

《お問合せ》愛知県立芸術大学　芸術情報・広報課　☎0561-76-2873（平日 9：00~17：30）http://www.aichi-fam-u.ac.jp

resonancia : II

陶磁専攻 芸術表現コース × 作曲専攻 作曲コース

※学年は昨年度のもの

ごあいさつ

陶磁専攻芸術表現コース
教授 長井千春

陶磁・作曲専攻の合同課題は 2 年目となり、今回はメディア専攻と芸術学専攻のサポートを受け、学生たちは昨年までの専門性の交換に新たな刺激を加えて創作に臨むことになった。
芸術教育、大学教育の在り方が転換期にあると思われる今日、各専攻の専門性の問題だけでなく、それぞれの分野は従来の思考を超えて、未知の手法や素材、異分野との交流をさらに進めるべきである。幅広い知見に触れることで得た自由な発想と俯瞰した視野は、自らを専門の拘束から解き放ち、次代の道に光を照らすはずである。
手で触りながら形作る陶磁作品は、常に視覚と触覚の束縛の中にある。触れることも観ることもできない音を操り創造する作曲家の手法とは、全く異なる創作アプローチである。
1万年以上、地球上で人間が携わってきた土による造形とデザインは、芸術としてどのように展開して行くべきなのか、音楽がもたらす震えるような力に向き合いながら、感覚の境界を超えた創造の可能性を陶磁の学生たちが感受することを願っている。

作曲専攻作曲コース
教授 成本理香

昨年度から開始した、陶磁&作曲合同授業は 2 年目を迎えた。昨年度と同じくお互いの作品にインスパイアされて新たな作品を生み出すという創作の連鎖に加え、今年度は芸術学専攻、メディア映像専攻の教員、スタッフの協力も得て、ワークショップも行なった。
学生たちは普段自分達が行なっている創作の枠から飛び出して、さまざまな思考を巡らせて、それぞれ新たなことに「挑戦」していた。できあがってきた作品は、普段の彼・彼女らの作品とは違ったスタイルのものも多く、私自身が一鑑賞者として楽しんで聴いた。
今年も、新しい挑戦から生まれてきた作品の数々を、多くの方にご覧いただき、また聴いていただきたいと願う。

永井友雪 × 内垣亜優

永井友雪
（陶磁 3年生）

『深海月』

『smugness』

内垣亜優
（作曲 3年生）

『くらげの行列』

くらげが自由気ままに泳ぐように、きちんと並んでいない様子を例えた「水母（くらげ）の行列」という言葉を元にした作品である。コントラバスの出せる様々な音色を用いて、ぷかぷかと漂いながら列を作ろうとするくらげを表現した。

『まっすぐ・うねる』

永井友雪さんの 30 個課題を元に作曲した作品である。直方体から円柱へ、直線と曲線が混ざり合いながら徐々に変化していく様子を、見たままの形を音と時間の流れに置き換えるようにして、直線と曲線に見立てた2つの楽器の掛け合いで表現した。

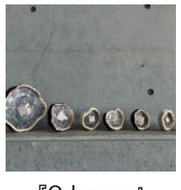
『くらげの景色』

永井友雪さんの作品「深海月」を元に作曲した作品である。この陶磁作品自体が深い海の底に沈んでいたらどんな景色になるだろう?という想像を軸に、くらげと土台になぞらえて付けた音列を展開させ、重ねていくことで表現した。

野口陽平 × 永安大喜

野口陽平
（陶磁 3年生）

『30個課題』



『Odyssey』

『振り子』

永安大喜
（作曲 3年生）

『「色空間」より「苅安」
～エレクトロニクス Ver. ～』

これは日本の伝統色をテーマとして作曲した弦楽四重奏曲『色空間』より「苅安」をエレクトロニクスにアレンジした作品である。「苅安」色の持つ明るいながらも燻んだ世界をエレクトロニクスと弦楽器の音色を組み合わせて表現した。

『軌跡を巡る、 辿らない』

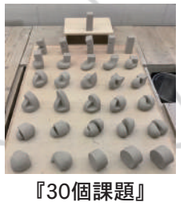
この作品は陶磁専攻の野口さんの30個課題をテーマとして作曲した。30個課題の中心部には双葉のような形があり、それぞれ端に向かって幾何学形態に変化していく。人間が生まれてから社会の型に嵌っていく人生をイメージし音楽で表現した。

『モノリスの片鱗』

これは「苅安」～エレクトロニクス Ver. ～を元に野口さんが制作した作品から、インスピレーションを受けて作曲した作品である。陶器でできた自然の形と、磁器でできた幾何学形態が混ざった様子から、ピアノの持つ鋭さと豊かな倍音を活かした。

三林沙貴人 × 川村瑳歩

三林沙貴人
（陶磁 3年生）



『30個課題』

『音霊』

川村瑳歩
（作曲 3年生）

『Telescope -Cassiopeia- 』

カシオペア座はアルファベットの M を描くようなかたちをしており、この作品の中では、カシオペア座の図形を、曲を構成するさまざまな要素として用いている。中でも、奏者の配置にこの図形を用いることならではの効果的な音響が得られるよう工夫した。

『 It’s Very 』

時間によって変化する一つの物体をかたどった 30 個の作品群を音楽に落とし込む際、一つの音楽的モチーフを少しずつ変化させるという方法をとった。変化はわずかずつながらも、新鮮さが失われないように心がけた。

『We make up 』

陶磁器を作る際、土の色によって上にかける釉薬の発色が変わることを知り、同じ旋律でも、どの音を重ねるかによって印象が変わって聞こえるような音楽を目指した。make up=仲直りする、という意味をもち、二つの楽器の関係性が、曲が進むにつれて変化していくように描いた。

浅野詩織（陶磁 院１年生）

『花の器』

『mari』

『わ』

そのほか作品名
『宝珠』
『motion』

佐光涼夏（作曲 3年生）

『Lighting』

この作品は、マレットのヘッドからインスピレーションを受けている。（マレットとは、打楽器を演奏する際に使われるバチのことで、先端に球体がついている。）その特徴から私は「ボール」を連想した。それにより、この曲はボールが跳ねたり転がったりする様子が表現されている。

『はかなさ』

この作品は、浅野さんの「花の器」からインスピレーションを受けている。花の柔らかく儚い雰囲気が表現された作品を見て、私も自分なりの「はかなさ」を表現してみようと考えた。聴く人が、それぞれの「はかなさ」を自由に感じていただければと思いながら作曲した。

『Ripple marks』

石膏で作られた浅野さんの作品を上から見ると、緩いカーブの波線が見られる。作品の質感や見た目から、私は「砂紋」を連想した。砂紋とは、水や空気が流れることによってできる規則的な波状の起伏のことである。この作品では、海底にできる砂紋を表現した。

大石愛莉（作曲 3年生）

『 幼子が道化 』

西條八十の「トミノの地獄」という詩をテキストとした。この詩の冒頭部分は、寺山修司監督・脚本による映画「田園に死す」に引用されている。私は詩と映画の両作品から影響を受け、幼子の儚い命への悲哀と鎮魂の祈りを込めて、能と狂言の形式を参照し作曲した。

『 噤む 』

私が浅野さんの作品を拝見したとき、「磁器なのにどうしてこんなにも柔らかそうなのだろう」と驚いた。何万年と残る陶磁の素材に、なめらかな曲線で花の有限な美しさを表現されており、その相対するものが溶けあうさまを私も表現した。

『 nirvana 』

私の作品から、浅野さんは地蔵菩薩の持つ宝珠の陶磁作品を生み出してくださった。そこから私は、ヒンドゥー教における個の根源アートマンと、神聖な知性ブラフマンがつながる「梵我一如」による、輪廻からの解放を表現することを試みた。

金 彗仁（陶磁 研修生）

『線の残像シリーズ』

『おばあさんの蓋物』

『atmosphere』

そのほか作品名
『木漏れ日』
『record』

渡邊奈波（作曲 3年生）

『連』

単純な音とリズムで出来たモチーフが連なって徐々に複雑に発展していくイメージで作った作品。『連』というタイトルには、さまざまな音やリズムの連なり、同じ音やリズムの連続などの複数の意味を込めた。

『編んだ記憶』

金さんのお祖母さんが持っていた網籠の小物入れの中に、小物入れの形をした「お祖母さんとの記憶」を収納するように、お祖母さんの小物入れのフレーズに「記憶」の小物入れのフレーズを編み込むことでそれぞれが一体とならないか試みた。

『白のらせん』

白くて大きなボウルのような金さんの作品から、外から隔絶された場所の中でエネルギーが循環しているような印象を受け取った。そこから、同じフレーズが繰り返されながら徐々に音高を上げていき、静かに上昇していくように作曲した。

溝上空弥（作曲 3年生）

『アルカイックな作例』

図形楽譜の作品。解釈次第で音高、リズム等も変わる楽譜である。母音で歌われる単、複旋律で、古の不詳の音楽を表した。しかし電子楽器であるテルミンの肉声に似て非なる音の登場などその時代性も崩壊し、不条理な世界となる。

『揺らぎ』

前奏として奏でられる伴奏の様な短い楽句が主題として形を変えつつ何度も繰り返される変奏曲である。金さんの作品にみられた様々な思い出から生まれる様々な造形に着想を得た。ハーモニーやメロディの表情を重視した。

『薮い調べ』

細部の聴取をさせないかの様な急速に鳴らされる音の嵐、その無機質な楽句は実用性を捨てた造形美を意識したものである。異様に速いパッセージや厚すぎて轟音と化した和音を終始続かせ、形式や構造を掴めないよう努めた。